

## フォーラム・ポーランド 2009年度会議

### —— ショパン ——

GEORGES SAND: [...] kiedy ja nic o tobie nie wiem. Gdzie ty jesteś w ogóle, Chopin?  
— z J. Iwaszkiewicza *Lato w Nohant*

日時: 2009年12月5日(土) 10:00-17:40  
場所: 駐日ポーランド共和国大使館多目的ホール  
主催: フォーラム・ポーランド組織委員会  
後援: 駐日ポーランド共和国大使館  
会費(事前振り込み): 2000円

10:00-10:20 「歓迎の挨拶」  
ヤドヴィガ・ロドヴィッチ 駐日ポーランド共和国大使

10:20-10:30 「開会の辞」  
関口時正(せきぐち ときまさ)

#### 午前の部——ショパン像をめぐって——

10:30-11:30 「国民作曲家としてのショパン——ある私物化の物語」  
Jolanta Pękacz (ヨランタ・ペンカチュ)

11:30-12:30 「《近代小説》の主人公としてのショパン」  
平野啓一郎(ひらの けいいちろう)

12:30-14:00 立食ビュッフェ

#### 午後の部——作品と楽譜をめぐって——

14:00-14:40 「楽譜に刻まれたショパンの音楽世界——前奏曲作品 28 を中心に」  
加藤一郎(かとう いちろう)

14:40-15:20 「ショパンの本質へ——ナショナル・エディションの必然性」  
河合優子(かわい ゆうこ)

15:20-16:00 「ショパンの手稿譜について」  
武田幸子(たけだ さちこ)

16:00-16:20 コーヒーブレイク

16:20-17:20 パネル・ディスカッション 「ショパンはどこにいるのか？」 司会: 平岩理恵  
パネリスト: 加藤一郎、河合優子、武田幸子

17:20-17:40 閉会の辞(田口雅弘)

お問い合わせ&お申し込み: [info@forumpoland.org](mailto:info@forumpoland.org)

## 講演者と講演梗概——

### Jadwiga Rodowicz ヤドヴィガ・ロドヴィッチ

ワルシャワ大学日本学科修士号・博士号。1977-1979 東京大学大学院比較文学比較文化専修課程留学。ワルシャワ大学准教授。1979-1992 「ガルジェニツェ」演劇センター研究員。1994-1999 駐日ポーランド共和国大使館一等書記官、参事官。2002-2006 同公使参事官。2006-2008 外務省アジア太平洋局上級参事官。2008.11～ 駐日ポーランド共和国特命全権大使。著書に『能における五人の女性』1993、『完全なる役者——世阿弥元清伝書』(2000)、『神の二項式——能楽における現実の浸透』(2009)など。



### Jolanta Pękacz ヨランタ・ペンカチュ[ポーランド語読み表記]

カナダ、ダルハウジー大学史学部准教授。音楽学・歴史学専攻。著書——*Music in the Culture of Polish Galicia, 1772-1914*, 2002. *Conservative Tradition in Pre-Revolutionary France: Parisian Salon Women*, 1999. 編著——*Musical Biography: Towards New Paradigms*, 2006. ポーランド出身の研究者。音楽学(ポーランド科学アカデミー)と歴史学(アルバータ大学)の二つの博士号を持つ。『ポーランド・ガリツィアの文化における音楽——1772-1914』は、「ポーランドに関する全ジャンル・全テーマにわたる書物」中の2003年度最良書として全米スラヴ研究振興協会賞を受賞。フランスの音楽史・社会史分野でも多数の研究論文を発表している。近年、ショパンについては、ポーランド国立フリデリク・ショパン・インスティテュート刊の『パリのショパン』および『ショパンの音楽世界——1840年代』にショパンとサロンの関連を論じた論文を発表。



### “Chopin as a National Composer: A Story of an Appropriation.” 「国民作曲家としてのショパン——ある私物化の物語」

ポーランドにおいて、ショパン像がいかに形成されてきたか、それらの像に対して時代の要請やイデオロギー、あるいはナショナリズムがどのように働いていたかということについて、史料にもとづき考証する。従来の音楽家の伝記に包含されるさまざまな問題を批判的にとらえ、新しいアプローチを実践する音楽史の潮流を代表する気鋭の研究者による、ショパンの評伝をめぐる問題提起。〔講演は英語で行われますが、もととなる原稿全文の日本語訳を会場で配布します。質疑ではポーランド語も使用できます〕

### 平野啓一郎

小説家。京都大学法学部卒業。1999年、大学在学中に発表した『日蝕』で第120回芥川賞を受賞。二月革命前後の19世紀パリを舞台にショパン、ドラクロワという実在の二人の芸術家を主人公に据え、綿密な歴史考証に基づく豊かな文学的想像力によって、近代ヨーロッパの精神史を描き出した大河小説『葬送』(2002)を始めとして、『滴り落ちる時計たちの波紋』、『顔のない裸体たち』、『あなたが、いなかった、あなた』、『決壊』などの作品があり、フランス、韓国、台湾、ロシア、スウェーデン等、翻訳を通じて海外にも紹介されている。2004年には文化庁「文化交流使」として一年間、パリに滞在。欧州各地で精力的な講演活動を行った。平成20年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。  
(写真 撮影:八二一)



## 「《近代小説》の主人公としてのショパン」

19世紀半ばのパリという街を舞台に小説を構想する時、ショパンは非常に魅力的な人物である。彼に注目することで、我々は、天才、ロマン主義、音楽といった事柄のみならず、国民国家やナショナル・アイデンティティ、印刷出版メディア、七月王政と、あらゆる問題を検討することが出来る。

近代という時代を、多角的に浮かび上がらせる象徴的な人物として、改めてショパンについて考えてみたい。

### 加藤一郎

国立音楽大学音楽学部ピアノ科准教授。東京芸術大学器楽科ピアノ専攻卒業。ピアノ音におけるタッチと音色の関係、ショパンを中心とするロマン派ピアノ音楽やバッハのクラヴィーア作品の演奏法研究を専門とする。著書に『ショパンのピアニスム——その演奏美学をさぐる』(2004)。専門的な論文を多数公刊するほか、財団法人日本ピアノ教育連盟北陸支部(2004)、韓国ピアノ協会第15回全国研究大会(2005)、財団法人ヤマハ音楽振興会(2005)、日本音楽学会音楽音響研究会(2007)などにおける講演活動や公開レッスン多数。昨年は神戸女学院大学大学院で「自筆楽譜及び教授用楽譜への書き込みに見るショパンの表現様式」を特別講演。



## 「楽譜に刻まれたショパンの音楽世界——前奏曲作品 28 を中心に」

作曲家の仕事は全て、自ら創作した作品を楽譜に残すことに集約されている。その意味から、作曲家が楽譜に込めたメッセージを正しく、そして豊かに読み取ることが、その作曲家の音楽を理解する為に先ずは必要になってくる。こうした楽譜の読み取りは真に創造的な作業であり、作曲家が何を考え、どのようなコンセプトでその作品を書いたかが鮮明になってくることもあるし、作曲家の微妙な心の揺れが描かれていることもある。また、時には個々の作品を越えて、その作曲家の広大な音楽世界が見えてくることもある。本講演では特にショパンの精緻な記譜が残された前奏曲作品 28 の自筆譜を例に取り、そこに彼がどのような意図を込めたか、その筆致まで含め、具体的に検討していく。そして、それらを通して、ショパンの音楽のあり方、固有な音楽言語、更にその世界観まで浮かび上がらせることができれば幸いである。

### 河合優子

ピアニスト。ショパンのスペシャリスト。愛知県立芸大音楽学部卒、同大大学院音楽研究科修了。2001年より、長期プロジェクト《河合優子 Chopinissimo シリーズ》を開始。これはヤン・エキエル編『ナショナル・エディション』に基づく、一人のピアニストによる世界で初めてのショパン全曲演奏会であり、同時にマスタークラスやCD全曲録音も開始。ポーランドではヤン・エキエルに師事。ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽院(当時)研究科修了。1995年マリーエンバート・ショパン国際ピアノ・コンクール第3位入賞。各国オーケストラと協演、数多くの国際フェスティバルに招かれ放送出演も多数。1999年ベアルトン・レーベル(ポーランド)のナショナル・エディション・ディスク全集に参加。ショパン国際ピアノ・コンクール in Asia 審査員、A・ルービンシュタイン記念若いピアニストのための国際コンクールなどの審査員をつとめる。



## 「ショパンの本質へ——ナショナル・エディションの必然性」

ショパンの音楽を愛し、その本質に近づきたいと時間と精魂を傾ける時、演奏という「音楽を再現する」行為のために最重要の拠り所となるのが楽譜です。“作曲家の意図に忠実な”楽譜という意味で使われている「原典版(URTEXT)」にも様々なものがあり、多くの人(日本に限らず、世界中で)、異なった複数の姿や内容を見せる原典版という紙の記録の前に、エディションの評価やその使用方法に関して迷う方も少なくありません。

細部の異なる楽譜同士を見比べ、聴き・弾き比べてみても、その楽譜の正しい評価・判断はできません。単純に「時が答えを出してくれる」というものでもありません。「ショパン本人はどう書き、どう思っていたか」という事実を知ることが第一です。ショパンの事実を知り、受け手の私たちが自分で判断する。ショパンの音楽の感動・本質を最も大切に考えれば、おのずと答えはみえてくるでしょう。

人間は誰もが完全ではなく、編集者がショパンと同一人物でない限り、厳密な意味での“完璧な”ショパン原典版全集は存在しませんし、将来も永遠にありえないでしょう。その上で人間としてどう最善を尽くしたらよいかと考える時、ナショナル・エディションの根本的な考え方が大変に尊いものだとわかるのです。

## 武田幸子

ショパン研究家。ポーランド国立フリデリク・ショパン研究所「ショパン手稿譜ファクシミリ全集」解説日本語版監修者。音楽之友社ムジカノーヴァに、「ショパンをめぐる人間模様」(2004年)、「ショパンコンクールを振り返って」(2006年)、「イギリスに残るショパンのピアノ」(2007年)を寄稿。映画『Chopin Pragnienie Miłości』日本語字幕制作およびカワイ・レプレ新宿にてレクチャー(2006年)。在野の研究家として、1989年よりヨーロッパ各地を訪ね資料収集、1999年第2回ショパン国際音楽学会議に公式オブザーバー参加、2008年国際ショパン学会参加。ピアノを水野ゆみ氏、和声・対位法・作曲を坪井伸親氏に師事。ショパン研究を、ジム・サムソン、ピョートル・ミスワコフスキ、ゾフィア・ヘフリンスカ各氏に指導を受ける。

## 「ショパンの手稿譜について」

ショパンの手稿譜は、ほんのアイディアを書き留めただけのスケッチから、出版社に提出され出版の元となった製版用自筆譜まで様々なものがあり、手稿譜それぞれに目的、役割がある。ショパンの場合、同じ曲に複数存在する手稿譜が一致することも、手稿譜と出版譜が一致することもめったにない。ショパンの手稿譜全体を見渡し、1つ1つの手稿譜の役割を分類していくことで、ショパンの創作過程に関する洞察を得ることができる。本講演では、手稿譜に関する基本的知識から、当時のフランス・ドイツ語圏・イギリスの出版事情、スケッチから出版までの流れなど、各段階におけるショパンの音楽的思考と手稿譜のかかわりについて焦点をあてる。また、進行中のプロジェクト「ショパン手稿譜ファクシミリ全集」について概説する。

## 平岩理恵(司会)

東京外国語大学大学院博士前期課程修了。ポーランド政府給費奨学生としてワルシャワ大学音楽学研究所に留学(2001～03年)、イレナ・ポニャトフスカ教授の指導を受ける。作曲家スタニスワフ・モニューシュコを中心とした19世紀ポーランド音楽史を研究。学士論文「ポーランド・ロマン主義文化における《ポロネーズ》と《マズルカ》」はショパン作品の演奏を志すピアニストの隠れたバイブルとなる。音楽家のレッスン通訳、音楽・観光分野の翻訳や執筆、ポーランド語教授を中心に活動する一方、自らもアマチュア音楽家としてピアノ、モダン・フルート、フラウト・トラヴェルソを演奏、ピリオド奏法に深い関心を寄せる。桜美林大学オープンカレッジ講師。NPO法人フォーラム・ポーランド組織委員会事務局長。

